清水正の

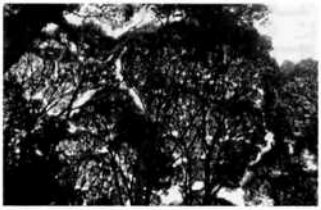
一里一尺

～自然をたずねて～ ❾

～晩秋の森～

賑やかな森

コーン、ポタ、バタバタ、コーン。晩秋の森は賑やかです。ひとり静かに森の中に入るといろいろな音が聞こえてきます。時々カンと高い音も混じります。少し強い風が吹くとバラバラという音も、これらはドングリが落ちてくる音です。高い音は近くにある車止めなどの金属にあたったのでしょう。バサ、ガサ、カサカサと音をたてて奥に入ります。ここは桃山丘陵の一角にある桃山御陵です。いわゆる鎮守の森でほとんどが常緑樹です。スダジイやアラカシ、ナナミノキ、クスノキなどの大きな木が繁っています。シイ・カシ林の見どころは何と言っても樹冠の美しさです。シイ林で空を見上げるとシイの木の樹冠（樹の最上部の枝や葉の茂っている部分）同士がぶつかり合うことなく、樹冠の間が蛇行した川のように見えます。濃い緑と青い空がシルエットをつくり出してくれます。京都の多くのシイ群落は社寺林にあるので、大きな社寺に行くと樹冠のシルエットを見ることが出来ます。桃山御陵には亜高木や低木類としてウバメガシ、マテバシイ、ネズミモチ、トウネズミモチ、モチノキ、カナメモチ、シャシャンボ、ヤブツバキ、アオキ、サカキ、ナワシログミなどが見られます。



シイの森の樹冠（城陽鴻ノ巣山）

植物の世界も厳しい生存競争

～赤と緑はクリスマスカラー～

秋には常緑樹の森にも彩りが添えられます。ナナミノキ、モチノキ、カナメモチ、アオキなどが木の枝一杯に赤い実をつけると目を引きます。その実を目当てに多くの鳥たちがやって来ます。ばさばさと枝の間から飛び出して驚くことがあります。大木が倒れてぽっかりと空いたところにイロハモミジやクヌギが大きく

育っていて突然明るくなるのも面白いです。この間の台風などで倒れた木を伐採して明るい空間が幾つか出来ています。そんなところにいち早く入り込むのが陽樹あるいはパイオニア植物と呼ばれるクサギやアカメガシワ、ヌルデなどです。森を賑わせてくれたドングリ達はどうなったのでしょう。足の踏み場もないぐらいにびっしりと林床を埋め尽くし、早くも根を出し春への準備をしています。去年落ちたドングリがこれまたびっしりと、稚樹として育っています。これらが全部育ったら森はシイだらけで隙間もなくなります。しかし大丈夫なようです。この稚樹たちは虫に食われたり、病気になったり、互いの競争に負けて次から次へと消えていきます。ほんの一握りのものが残り成長し、更に淘汰されて、森にあるような大きなシイの木になれるのはどれほどでしょうか。私たちが受験競争で東大や京大に入るよりも遥かに難しいのです。こうして大きくなった樹々たちを畏敬の念を持ってみてやりたいものです。

ナナミノキ

クサギの実

スダシイの稚樹たち⇒コジイの稚樹たち

ドングリ(アラカシ)
の実の落果

知っていますか？ドングリの木

近畿から西日本の丘陵や低地の多くは暖温帯と呼ばれ、常緑樹の植物群落が主をなしています。そしてその代表がシイ・カシ類です。いわゆるドングリの木たちです。ドングリは古くから子どもにも大人にも親しまれてきました。観察会でもドングリ拾いは人気です。でも「ドングリって何」と聞くと「丸いやつ」とか「かたいやつ」とか、わかったようなわからないような答えが返ってきますが、みんなの中ではそれなりのイメージが湧いてきて納得する感じです。実は定義も狭いものから広いも

のまであって一様ではありません。広義の見方でいくとブナ科果実の俗称と言えます。ではどんなものがあるのでしょうか。クリ、ブナ、イヌブナ、スダジイ、コジイ（ツブラジイ）、クヌギ、アベマキ、カシワ、ミズナラ、コナラ、ナラガシワ、ウバメガシ、アラカシ、シラカシ、アカガシ、ツクバネガシ、ウラジロガシ、オキナワウラジロガシ、イチイガシ、ハナガガシ、マテバシイ、シリブカガシと二二種類です。随分たくさんありますね。でも京都では大半のものを見ることが出来ます。ただハナガガシは四国・九州、オキナワウラジロガシは奄美・沖縄までいかないと見られません。マテバシイも自生を見ようと思えば九州・沖縄までいかなければなりませんが、ウバメガシとともに公園や庭木に良く植栽されているので普通に見られていることでしょう。カシワは北海道から九州で分布とされていますが、京都ではレッドデータの準絶滅危惧種となり見ることは難しいです。

コナラ（左）オキナワウラジロガシ（右２つ）のドングリ

ドングリの木を全部見てみよう！

私は沖縄に行った際、西表島のマングローブ林を見た後、山に入りオキナワウラジロガシを見て、そのドングリの大きさにビックリしました。子どもの時、口にほおばったあの大きなドングリ飴そのものでした。カシワは私の中学校の周辺（札幌市手稲）に普通にありました。ということでハナガガシだけが自生を見ていないドングリとなりました。現在、府立植物園ではハナガガシもオキナワウラジロガシも植栽されたので、日本にある全ドングリが見られることと思います。京都にいて全国のドングリを植物園でめぐって下さい。

ひとことでドングリと呼びますが随分たくさんの種類があることがわかりました。観察会などでは、これを頭でなく具体物として知ってもらうためにドングリ拾いをします。その時、実だけでなく殻斗（俗に帽子とかパンツとか言っています）も拾ってもらいます。すると大仏さんのぶつぶつ頭のようなもの、しましま模様のお椀、もじゃもじゃ頭の三つが見つかればバッチリです。そのほかに実全体をくるむ殻斗も見つけましょう。二二種もありますが殻斗で四つに分類できます。これだけでもちょっと世界が広がります。実の形もよく見るとお尻の凹だもの、細長いもの、丸いもの、頭にすこし毛

があるもの、角張って三角錐のものと色々見つかります。子どもも大人もワクワクしてきます。もっとワクワクするために食べられるドングリがありますというと、一層テンションが上がります。矢張り「食」というのは興味を引く大きな動機です。ちなみに食べられるドングリをあげるとスダジイ、コジイ、ブナ、マテバシイ、シリブカガシ、イチイガシです。特にシイは美味しく、子どものころ夜店に行くと炒ったシイの実を紙袋に入れて売っていました。ブナも山ソバと言って山里での食材でもありました。ドングリの話をすればつきませんが、今回はこの辺りにしておきましょう。

山に登れば見られる落葉広葉樹の森

一方、晩秋から冬に向かう落葉樹の森は常緑樹の森とは異なり、色鮮やかで明るく、そこにいる人たちも心騒がせます。

京都市の北部八丁平*を訪れたときは、マユミ、ウリハダカエデ、ハウチワカエデ、トチノキ、タカノツメ、コシアブラ、カナクギノキなどが赤から黄色のグラヂュエーションの色をなし、艶やかな錦織を見るようでした。そこに時々入るスギの緑、空の青が黄色や赤を一層引き立てます。足下にはそれらの落ち葉が絨毯を敷いたかのように染め抜きます。空をカンバスにそれぞれの葉がきりきりと舞い落ち舞い上がり、ひらひらと飛んでいく様は瞬描として瞼に焼き付きます。大きなマユミの木が沢山あり淡いピンクの実、キミズミの黄色の実が無数と言っていいほど実っています。その合間にはサワフタギが「僕を忘れないで」とばかりに瑠璃色の実をつけています。「八丁平も昔と比べれば…」と言われますが、なかなかどうして立派なものです。

もう一つ大事な主役を忘れていました。鮮紅色に染まったツタウルシです。見事です。落ちた葉っぱをつい拾いたくなりますが「ご用心」強力な毒成分でかぶれます。ウルシの

落陽広葉樹の森

マユミの実（八丁平）

ツタウルシ（八丁平）

仲間でも最強です。やっかいなのはツタに付いているときは三枚葉の複葉ですが、下に落ちるときは一枚ずつなので他の植物の葉と間違ってしまうということがあります。「秋のウルシは毒性が弱くなっているからかぶれない」という話も聞きますが、私は試したことがありませんので真偽の程はわかりません。「君子危うきに近寄らず」です。

＊八丁平は京都市北部久多に広がる標高約八〇〇mの落葉広葉樹の森です。

身近な里山

一二月末、天ヶ瀬森林公園・槙尾山に出かけました。八丁平と違い常緑と落葉の混じる広葉樹林です。いわゆるどこにもある里山です。天ヶ瀬ダムの鳳凰湖を見晴らせるハイキングコースです。登り口はユリノキやケヤキ、サクラ類、モミジ類などの植栽したものが多くありますが、上がっていくとトチノキやカツラなどの植栽もあるとはいえ自然林の被度が増してきます。目立ったのはソヨゴ、ヒサカキ、アセビなどの常緑樹が多く単純です。しかし、ここのソヨゴは圧倒的に雌木が多く、ほとんどと言っていいほど赤い実をつけて、目を和ませてくれます。更に上がるとコナラの大径木やモチツツジの群落が見られるようになります。所々にカナクギノキやホオノキなども見られ落葉樹の数が増えてくるとともに森は明るくなりました。かつては里山で薪炭利用していたものが、時代とともに利用されなく放置されたためか、かなりの大木になったコナラが見事に広がっています。近くの説明には松枯れ・ナラ枯れが入り、芽ばえたものはシカの食害にあい、最近の台風などで木が倒れ荒れていますと書いてありましたが、立派なコナラが沢山残っている方だと思います。そしてまだ柞紅葉（ハハソモミジ）が所々に残っていました。コナラの芽吹きの時期にはもう一度行ってみたいと思いました。その頃には林床にどんな草花が咲くのでしょうか。

＊ひろば二〇五号「一里一尺～自然をたずねて～⑤」に詳細

鳳凰湖（天ヶ瀬ダム湖）

ソヨゴの赤い実